

間島 寛 (まじま ひろし) 様 岩谷産業株式会社 代表取締役 社長

はじめに

(会長) 本日は大阪大学工業会の「各界で活躍されている卒業生への会長インタビュー」のためにお時間をいただきありがとうございます。それではよろしくお申し上げます。

大阪大学工業会にとって、同窓生が、このように各界で高く評価される活躍されていることは誇りであり、特に個人的な話ですが、在籍していた大阪大学工学部の溶接工学科の卒業生が活躍されていることは大いなる喜びであります。

今回は、その活躍の見える化を図って、母校の価値を高めると共に、同窓生、特に若い人々や現役の学生さん達にとっての大きな励みとなることを願って、会長がインタビューをさせて頂き、各界で活躍の原点や努力の源などをお聞きし、同窓生各位の今後の活躍や目標へのある種の触発を誘起するようなお話を伺うことにいたしました。

間島様は、1981年、大阪大学工学部 溶接工学科を卒業され、直ちに岩谷産業株式会社に入社され、営業部門を担当後、経営企画分野で長くご尽力され、2012年には取締役に就任され、2020年6月に代表取締役社長執行役員に就任されております。



環境を考えて80年：炭素の少ない燃料の「プロパン」から「水素」へ

(会長) 本日貴重なお時間を頂き、インタビューさせて頂くことになり感謝申し上げます。それでは、インタビューさせて頂きます。

やっぱり岩谷産業さんのお話を伺うには、まずは、「水素社会」ということになろうかと思いますが、この水素社会の岩谷産業さんでの位置づけ、あるいは、社の将来展開の上で水素をどのように考えておられるかを伺うことからインタビューをはじめさせて頂きます。

(間島社長) 創業者岩谷直治(05年死去)は**環境**を一番に考え経営してきました。我々が会社に入ったときから、創業者が戦時中の1941年に油脂メーカーの余剰水素を売り出したのが日本の**水素ビジネスの草分け**といわれ、1950年代にプロパンの事業を始めたのも、石炭や油よりカーボンの数が少なく、**カーボンの数が減るほど環境に良いのだ**との信念によるものです。そして、カーボンが無くなると**水素**が残ります。このように「**水素こそが究極のエネルギーだ**」との考えが、社内で受け継がれてきました。

水素そのものは、現在、我々の売り上げの中で、その割合は決して大きくありませんが、今後は水素がもっと注目されると確信しています。創業以来水素を扱ってきましたが、基本的には工業用途に限られていました。ただ、必ず水素が「エネルギー」として利用される時代が来るという思いが、我々の中では受け継がれていました。

それが現実になるきっかけが、**2015年**にトヨタさんが燃料電池車「**ミライ**」を販売された事です。遂に**車が水素で走る時代**が来たのです。それ以前では、ロケットの燃料に JAXA さんに水素を収めてはいたのですが、町を走

っている車が水素で動いているということがきっかけになり、それ以降水素のエネルギー利用がどんどん広がってきました。

(会長) 先ほど家庭用にも水素の展開を考えているとお話がありましたが、プロパンを展開しておられる中で、水素の位置づけはどのようにお考えですか。

(間島社長) そこは考えています。家庭用のプロパンに水素を混ぜるとか、クリーンな水素に触媒を介してプロパンあるいはメタンを作るなど、家庭用のエネルギーとしても、水素の利活用を検討しており、「使う」と「造る」の両面からCO2削減を図ろうとしています。

(会長) 岩谷産業のHPなどを見せて頂くと、1930年から酸素・溶接棒・カーバイドの販売を、今話のありました1953年に「マルキプロパンガス」としてプロパンガスの全国販売を開始されたようで、想いとしては水素と共に80年と謳っておられますね。お話のように近年、その想いが商売として現実になってきたと感じます。

社長が公表資料などで「夢遺産」とお話ですが、その意味は。

(間島社長) 夢遺産という言葉は、番組のタイトルだったのですが、その中でお話したのは、我々がしっかりと次世代に、エネルギーとして水素が使っていけるような事業を展開していきたいということでした。

[世界で唯一の大阪大学溶接工学科へ](#)

(会長) いま、岩谷産業の水素をテーマに基本的な経営方針などについてお伺いしましたが、振り返って大学への入学や大学生活についてお話をお伺いします。

私事ながら、溶接工学科を卒業し、その後溶接工学科で教育に携わって来たものとして、卒業生が活躍されていることは喜びでもあります。溶接工学科の卒業生は、各界で活躍ですが、かつてに比べて最近社長として経営に携わっておられる方が少し少なく、間島社長様はある意味貴重な存在でもありうれしいことですね。

(会長) ところで、間島社長様が大阪大学工学部溶接工学科を目指された動機はどのようなことでしたか。

(間島社長) 高校の時に、天王寺高校で、担任ではなかったのですが、進学指導の先生が、溶接工学科は世界に二つある。ただ、博士課程まで持っているのは世界中で大阪大学だけだとお話になりました。工学部には進みたいと思っていたものの学科までは意識していなかったのですが、その先生の言葉が非常に強く心に残りまして、当時第5志望まで書けたかと思いますが、溶接工学科を第1志望にしました。

(会長) そうですか、その想いは私も全く同じでした。家が貧しくてまず国立大学へ入ることが絶対条件で、阪大の工学部で合格最低点が高い学科が幾つかあったのですが、当時の「蛍雪時代」という受験雑誌で、やはり大阪大学溶接工学科は世界唯一であるとの記述を頼りとして選択しました。キーワードは大切ですね。

ただ、当時は工学部の中で入りやすいとはいえ、その後の入試の成績を知らせてもらったのですが、全く同じ試験問題であった医学部の最低点は上回っていました。ところが、現在は、工学部の数名しか

医学部に入れない状況で、どうも我々が目指した工学部の位置づけが当時と変わり過ぎている感じもします。

「世界で唯一」を判断基準にされたことに敬意を感じます。

(会長) 当時、アメリカ・コロンバスにあるオハイヨ州立大学 (OSU) に修士課程までの溶接工学科があり、OSU を修了した学生が博士課程のあるレンセラー工科大学には有名な溶接の専門の教授がおられ、そこに進学し、ニューヨーク州のトロイにある大学でそのような博士課程の学生と会ったことがあります。

その後、中国が経済発展を目指すというので、溶接工学が大切だということで約 50 大学に溶接工学科ができました、この時点で、世界唯一の言葉が通じなくなりましたが。でも中国には今は 2 つほどしか残っていません。

(会長) ところで、学生時代はサッカーをされていたのですが。

(間島社長) いいえ、高校時代にサッカー部に入ったのですが、健康診断で指摘を受け、部活動はあきらめました。但し、サッカーをしたいという思いは強く、燃え残った感があり、会社に入ってからサッカー部に入り、また、転勤先では仲間を集めてサッカーチームを作り、広島やベトナムのハノイでもサッカーを楽しみました。今でも時々フットサルはやっています。

溶接工学の広い学問分野への驚き：溶接工学科や大阪大学同期生の活躍と人のつながり

(会長) 今もとは、お元気でなによりです。

このような「唯一」をよりどころに大学に入られたのですが、大阪大学の印象はどうでしたか。

(間島社長) そうですね、石橋で 1 年半、その後北千里で専門教育を受けましたが、一番の印象と驚きは、溶接工学という学問分野の範囲の広さです。冶金は溶接冶金、力学は溶接力学、それに電気、制御、など工学部の全てをカバーする分野という感じです。全部学ばないと一つが仕上がらないという厳しい環境にいるなと思ったのが感想でした。

(会長) そうですね、工学部の全学科を網羅したような学問分野で、元大阪大学 8 大総長先生は、学問を体系化され、昭和 19 年に「溶接工学」の書籍を発行されています。溶接工学科が発足したのもこの昭和 19 年です。

網羅しているから浅いというわけでなく、もし溶接工学の特徴を挙げると、「過渡現象」と「巨視的異材」の二つであろうとも思われます。

(会長) このような広がりのある分野を卒業された方々は、就職後も、広い分野で活躍されています。

(間島社長) そういえば、確かにいろいろな分野で溶接出身という方にお会いしますね。

(会長) この広さもあってか、我々の時代より前の先輩方は、溶接プロパーの仕事でなく、マネジメント分野について人との割合が高く、その方々が、それぞれの企業経営陣に就いておられるようです。

ただ、学問分野が広いことで経営者になれるわけではなく、敢えて言えば、配慮すべき問題が多岐にわたった時の**解決力・対応力**でしょうか。

このような広がりのある溶接工額の中で、丸尾研で卒業研究を行われたようですが、丸尾先生のご指導を受けられたとか。

(間島社長) そうです、私 4 年生の時に当時の丸尾先生の研究室に所属し、拡散接合の研究を行っていて、平田先生が助手で、ご指導頂きました。

(会長) あの当時の助手は、各講座に 2 名いて、直に学生の指導に当たっていました。この助手の先生の、学生と一緒に遊みながらも研究に取り組む姿勢を共に学ぶことは、偉い教授の先生のご指導、特に結果を求める指導とは違った人材養成に役立ったように思います。

教育、人材養成の点では、当時の助手は重要な役割を果たしていたと考えるのですが、現在は、その若手の先生方を減らしてしまって、若手の指導者(共同研究者)少ないことが大きな問題ですが。学生の研究指導については、教授が直接行うことは必ずしも悪くはないのですが、往々にして、結果を求めがちなディメリットもあるかも知れません。

そのような中で、丸尾先生のご指導はどうでしたか。

工学部の特徴たる卒業研究で学んだことが経営に生きる

(間島社長) 丸尾先生のご指導は大変厳しかった感じですね。平田先生は助手で、年齢も近く相談相手のように接して戴きました。

卒業研究の折に、非常に印象的なことがありました。拡散接合で測定データをプロットするのですが、データが少ない中で、相関関係に曲線を引いたのですが、こうあればいいなという想いがあったためです。それを見て丸尾先生は、間島君の発表は面白い、と言われたので、褒めてもらっているのだと思ったのです。後で助手の平田先生に呼ばれて、あれは褒め言葉ではない、技術者は**虚心坦懐**に結果を眺めなければならず、思い込みが強いのは良くないと。

そのときにマネージメント力では無いですが、ずっと真理を虚心坦懐に追究するという技術者のあり方を学びました。

(会長) このように大学で学ばれて、もう一つの大きなポイントは人的なつながりかと思いますが、いかがでしょうか。

(間島社長) そうですね、やはり同時期に同じ大学で学んだことは、**縁**でもあり、今もその時の仲間・友達との関係が続いています。

例えば、丸尾研の同期で、やはり4年で卒業した友人は、その後三井松島産業の社長に就任しました。また、学部学科は違いますが、今でも十数人で年に何回か集まっていて、例えば、経済の出身ですが三菱ガス化学の社長や、1年上には、マイクロソフトの社長などを務められた先輩もおり、これらの友人との「**つながり**」を考えると、本当に大阪大学を卒業して良かったと思います。

東京の**大阪大学経済人会**では、西尾総長にもきて頂きましたが、その会でも、学生時代から知っている人が数名参加しています。

(会長) お話頂いたような大学生活を過ごされたのですが、大学生活での印象や、こうしておけばよかったことなどございますか。

(間島社長) やはり一番の印象に残っていることは、**卒業研究**ですね。

(会長) そうですか。工学部の教育体制で卒業研究こそが、学んだ知識を活かして、物事に取り組む、その**取り組み方**を学ぶものですから。

(間島社長) なかなか厳しかったです。データを取ることに四苦八苦ししました。

結果として、自分の expertise というか、得意分野を見定めていたら、また、違った道があったかも分ならず、学部での教育、卒業研究を通じて、工学の分野での「自分の道」を見つけられなかった事は、反省するところです。

丸尾先生から良く言われたのですが、「**知的好奇心**」をもつということと、**論理的に物事を詰めていくことの重要性**について、大学で学ばせて頂いたと思います。

(会長) 経営者としても企業経営で感じられることですか。

(間島社長) いろいろな事に対し、疑問を感じ、なぜそうなるのか、それを何回も問いかけていくスタイルは、あの頃、身に着いたものだと思います。

就職しても溶接と離れられず：ベトナムでの貢献

(会長) さて、大学時代の活動についてお話を伺ってきましたが、溶接工学科を卒業されて就職となるのですが、どのようないきさつで岩谷産業を選ばれましたか。

(間島社長) 学部での研究活動を経験し、就職分野は製造でないところを、と考えました。

当時、岩谷産業に、先輩がおられるかどうかも知らず、入社後分かったのですが 3 名の先輩がおられました。私が入社後に、溶接工学科の卒業生が数名入社しました。現在、水素事業の責任者をやっている津吉専務も溶接工学科の卒業生です。

(間島社長) 就職にあって、その頃の友人の一人が石油化学学科だったのですが、その友人の家が岩谷産業と取引があり、**面白い会社**だとの話を聞いていました。

就職に当たって、これといった目標もなく、あまり大規模なところよりはとの思いのあるなかで、納得できる理由を見つけている感じでした。そこで岩谷産業にお話を伺うと、創業者も溶接分野で大阪大学と関係があったとの話を聞き、溶接工学科を選んだときの大義名分と同じで、何かよりどころがあればと受けてみました。結果としてあまり深く考えずに選んだ気もしますが、逆に言えば、どこでもやってやろうとの気持ちもあったと思います。



(会長) 入社後は、岩谷産業でどの分野で活躍されてきましたか。

(間島社長) 営業分野に配属されたのですが、人事との面談の折に、配属に希望はあるかと問われ、溶接分野を飛び出してきたので、溶接と関係ない分野を希望します、と話しましたが、配属されたら、見事、溶接棒・溶接機を売る分野でした。

(会長) やはり溶接からは離れられ無かったということですか。

(間島社長) 結局、入社から40歳頃までは、基本的には溶接機材の営業で、溶接に関連する神戸製鋼さん、大同特殊鋼さん、ダイヘンさんなどと密接に関係する仕事をしていました。

(会長) 対象は。

(間島社長) 主に溶接材料と機械設備でした。

ちょうど1995年神戸の震災の年ですが、ベトナムのハノイに駐在事務所を開設するという事になって、初代の所長として赴任しました。まだまだベトナム戦争の名残の時期で、重工業の匂いもほとんどしない時だったのですが、タイの神戸製鋼さんやダイヘンさんに助けて頂いて溶接分野で開拓していきました。

そのときに、ハノイ工科大学に溶接工学科があって、溶接の分かる人がいるというので足繁く通いました。ベトナムで現地の溶接技術協会を作りたいと言うときには、帰国時に平田先生などにも相談に行ったりしていました。

(会長) いまは大阪大学との連携協定も結ばれ、大阪大学接合科学研究所 **ベトナム溶接研究会**の事務局がハノイ工科大学「**JWRI ハブ拠点**」に置かれており、緊密な連携が図られ、ベトナムの溶接に関する人材育成に貢献するとともに、ASEAN・インド太平洋地域で世界レベルの溶接・接合研究新拠点を目指しているようです。

世の中に必要な人間となれ：必要とされるものこそ栄える

(間島社長) ベトナムから帰国してしばらくは溶接材料・機械関係の業務に携わりましたが、その後は、いろいろな分野を担当させてもらいました。

一番長く担当したのは、岩谷グループ全体の情報システムの再構築で、関連会社の社長を兼務しながら6年あまりかけてやりました。DXのはしりでした。その後経営企画部を担当し、その後は役員として岩谷産業の経営に直接関係することになりました。

(会長) このような経緯を経て経営の立場に立たれるのですが、岩谷産業の売りとして、「世の中に必要とされる企業」であり続けたいと述べられているのですが、その意図するところはどうかということでしょうか。

(間島社長) これは**社是**であり、創業者の最初の言葉であり、

世の中に必要な人間となれ

世の中に必要なものこそ栄える

との言葉を入社時から朝礼などで復唱していました。この言葉の中で重要なことは、まず、人として必要とされる

人間になるところがポイントなのです。いろいろな事業を行うとき、また海外で事業を行うときなども、そこに関係する人々やその国の人々の役に立つことを考えて仕事をすべきとの想いです。

水素ビジネスの今後の展開：水素が必要なものに

(会長) その意味で世の中に必要とされるものこそが栄えるということで経営を進められているというのですが、最近はやはり水素が前面に出でてきているようにも感じますが。

(間島社長) 私は、水素を直接担当したことはないのですが、事業計画や投資計画などは企画部として関係してきました。

やはり先ほども申し上げましたように 2015 年の燃料電池自動車 (FCV)「ミライ」の発売の発売からエネルギーとして認められるようになり、国内初の水素ステーションを開業し、現在、全国で 53 カ所の運営を行っています。水素事業の中で、特に拘っているのが、液体水素です。現在、液体水素を日本で製造しているのは岩谷産業だけで、最初は、2006 年に関西電力さんと共同でプラントを建設しました。これが水素ビジネスへの「ビッグバン」の始まりともいえます。



イワタニ水素ステーション



株式会社ハイドロエッジ

(会長) 水素は燃料電池としてミライのような活用の方向は考えられますが、プロパンを取り扱ってこられて家庭用への戦略はどうお考えですか。

(間島社長) そうですね、プロパン事業では、主として、地方が中心になるのですが、いろいろな手法を考えています。集合住宅では、パナソニックさんなどが既に販売されていますが、純水素の燃料電池で、水素のコストさえ良ければ燃料電池で発電することができます。また、プロパンに、水素を 10%、20%程度混合する実証も行っていますし、グリーンエタノールからグリーンプロパンを作るなど、いろいろな研究開発を水素技術研究所で進めています。

(会長) プロパンの場合は個別が多くて、ネットワークの問題もあり、どのように運ぶかが問われますが、大型の燃料電池のようなものと、東京オリンピックの選手村で行われたようなガス管での輸送も可能ですね。実は、選手村のガス輸送について、その認可関係の経産省から委託委員会で委員長をして審査をしたのですが、中低圧のガス輸送には、ガス管についてほとんど問題が無いので、水素の利用の形がどのように決まるかが課題ですね。

(間島社長) トヨタさんが富士の裾野で進められている実験都市「ウーブン・シティ」では、水素をカートリッジ型の容器で供給し、燃料電池で発電する事も検討されています。当社もいろいろな可能性について実証を進めています。将来的にはプロパンに変わって水素ガスを配送する可能性もあると思います。

開発研究の意義：人材養成への大学との有効な連携を

(会長) このような現状において、「開発研究」の意義と申しますか、研究所の位置づけと目指すものはどのようなお考えですか。

(間島社長) 当社はどちらかというと、販売を主として進めてきた会社ですので、今までは、ガスの用途開発や、保安の分野に力を入れていました。但し、水素を中心とするエネルギー事業に関しては、関連設備に使用する材料や接合方法の検討・開発が大変重要な課題となります。水素は液化するとマイナス 253 度となり、また、燃料電池車への水素の充填圧力は 70 メガパスカルの高圧で行う為、材料試験でも極低温とか超高压という条件下での特性を調べるなど、これまで行っていなかった試験環境が不可欠となります。そのため、尼崎の中央研究所と分離し、岩谷水素技術研究所を創設し、我が国ではこの研究所でしかできないような試験装置などをそろえて、水素研究の拠点としました。これによって、大手の鉄鋼メーカーさんとも材料の開発研究などを一緒にさせていただいています。そして、設備の整備と併せて、人材の採用・育成にも努めています。

(会長) 今の状況からも人材が非常に大事な時代でもあるかと思いますが、どのような人材養成のあり方をお考えですか。

(間島社長) 博士課程などで研究されている、これからの技術を支えていく世代の人々と連携して、技術開発に取り組めないか、大阪大学と相談しています。博士課程の学生さんやポストドクターの方々に我が社の研究内容に興味を持ってもらって共同で研究を行っていただくとともに、リボルディングドアのように、逆に大学の方にも当社の社員が学びに行くような形を望んでいます。

(会長) 大阪大学には、産学連携の形として、私の時に始めた共同研究講座や、その後馬場理事などが更に発展させた協働研究所が存在していますが、産学交流の仕方に望まれるところがあるようですね。

(間島社長) 大学は素晴らしい人材を持っておられますので、我々が取り組んでいる分野において、大学と連携することで、研究者や学生の皆さんに、我々の事業、研究開発に興味を持って頂き、技術面・人材面での交流が進む事が望まれます。

今後、様々な形で大学との連携を進め、とくに、若い人々とのつながりが生まれることを期待しています。

水素用途の拡大：万博で水素燃料電池船を走らす

(会長) 水素が一般の人に一番見やすいのは車であろうかと思いますが、現状を見ると、FCV と EV の戦いのように見えていますが、今後の展望は水素ビジネスの観点からどう考えておられますか。

(間島社長) 水素を含めたカーボンニュートラルへの取り組みに関しては、2022 年度が、ターニングポイントであったと感じています。日本の製造業では、建設機械や農業関連、港湾関連の分野など、海外比率の高い分野

で、カーボンニュートラルへの取り組みが進んでおり、水素やアンモニアの利用が具体的な実証段階に入っています。モビリティに関しても、最初は乗用車からスタートしましたが、現在は、燃料電池トラックやバスの分野に拡大しており、岩谷産業も、今年度中に 3 ケ所のトラック用の水素ステーションを建設する予定で、高速道路では、東名高速の御殿場にも建設しています。

トラック・バス以外にも、鉄道、船舶での水素利用の検討が進んでいます。2025 年に開催される、大阪関西万博に向けて、岩谷産業は水素燃料電池船の建造に取り組んでいます。150 人乗りの船で、万博会場とユニバーサルスタジオ、中之島の間を運行する予定です。

また、水素技術研究所に水素燃料電池を設置し、マイナス 253 度の冷熱を空調に利用する試みもスタートします。このように、水素の用途はどんどん広がっています。

(会長) お話の船舶などは、世界的なレベルからも CO₂ の排出量がかなり高いところであり、是非実用化につなげて頂きたいですね。

お話のような水素利用の裾野拡大は水素ビジネスにとってビッグバンにつながりそうで、政策的な動き、環境要求などふまえた適切な動きを期待したいですね。



水素燃料電池船

世界中の国々が求める自国のエネルギーの活かし方に貢献する水素：水素ビジネスの主体に

(会長) このような状況の中で海外への展開はどのように進められていますか。

(間島社長) 先ほどもオーストラリアのクイーンズ州の首相とのミーティングに出席していたのですが、オーストラリアでは 2 つの大きなプロジェクトを進めています。一つは褐炭から水素づくり、発生する炭酸ガスは CCS で地中に固定し、製造した水素を液化して、川崎重工さんが建造している液化水素運搬船で日本に運ぶというプロジェクトと、もう一つは、太陽光と風力の再生可能エネルギーで水を電気分解して、水素を作るというプロジェクトです。

また、アメリカのカリフォルニア州では、現在 6 カ所の水素ステーションを運営していますが、水素ステーション事業だけではなく、カナダなどの豊富な水力発電で水素を造るプロジェクトも検討しています。

(会長) 世界中を見たときに、エネルギーの分布にいびつさが見られますが、そのような状況で、どのようなバランスある経営戦略を取るかの難しさがありますね。

(間島社長) そうですね、東京本社に、中南米の大使の方々がお見えになりまして、どんな要件かとお伺いすると、皆さんおっしゃることはみな同じで、「我が国には有り余るほどの太陽と地熱と水力と風力がある」と。彼らは自国にある自然のエネルギーを何とかして活用したと考えておられます。

そうすると「水素」なのです。クリーンな水素が、大量にそして安価に製造できれば、アンモニアに、メタンに、そしてメタノールなども製造できるのです。

このように全世界で自国のエネルギーを活かしたいと考え、水素にならないか、エネルギー資源にならないかと考えています。これからそのような自然エネルギーを活用しようとする動きがますます出てくると考えられます。

(会長) 確かに各国がそれぞれにその土地が持っているエネルギー源があり、それをいかに活用するかであり、そのエネルギーの変換の手段として水素を活かせるということで、その意味では、2030年、2050年の大きな目標に向けて、岩谷産業さんとしては大きな役割を果たせるとお考えですね。

(間島社長) クリーンで安価な水素を大量に作り、日本に持って来るとなると、到底一企業では不可能です。国や企業が連携することが不可欠であり、その中で、我々の強いところ、必要とされているところをいかに強めていって、そのような仲間に入っていか、ということが一番重要な点であると考えています。

(会長) 今後期待される展開と言うことで、国も水素にかなりの支援を発表も空いていますが、企業連携なども進んでいますか。

(間島社長) 当社と川重さんエネオスさんと一緒に取り組んでいるプロジェクトは3000億円の規模のプロジェクトですが、それに対して、国から2200億の支援を頂くことが決定しています。船や受け入れ基地の完成目標は2027年頃と考えています。引き続き、水素ビジネスの拡大につながるプロジェクトには積極的に関与し挑んでいきたいと考えています。

先端研究をリードする「研究の聖地」の創設への大学への期待

(会長) 世の中はグリーン社会やカーボンニュートラル社会などと謳われてはいるのですが、実際の動きには、どこか戸惑いが見られる感じもしますが、岩谷さんとしてはまとまった経営戦略をお持ちのように思いますが。

(間島社長) 水素の製造や、需要の拡大に関する研究開発は進んではいますが、一方で、事業活動の中で排出するCO₂の削減という点に関しては、あまり進んでいません。産業ガス事業では、空気分離プラントで、窒素、酸素、アルゴンを製造しているのですが、これは基本的に電気がエネルギー源で、我々の輩出しているCO₂の7割ぐらいはその電気によるものです。これを減らそうとすると電力会社さんの方で、電源構成を変えてもらわないと減らないのです。そういう意味では、足下で出しているものをどのように減らすかが課題です。

(会長) このような課題をかかえておられる中であって、大学に期待することやこうあって欲しいということはあるですか。

(間島社長) 先ほども申し上げたのですが、大阪に本社があり、研究所もあり、その大阪に大阪大学があるわけですから、是非とも色々な形で連携できればと考えています。これまでも寄付講座のような形では連携していたのですが、さらに相互の理解を深め、協働できるゾーンを増やし、融合的な研究ができる体制を構築するとともに、人材の交流も深めて行ければと期待しています。

現在、神戸のポートアイランドに新しい8階建ての研修所の建設を行っています。関西には、川崎重工、神戸製鋼、関西電力、パナソニックなど、「水素」に関して最先端の技術を持っておられる会社が集

積していますので、皆さんと連携して、我々の研修所で「水素関連のカンファレンス」を開催するなど、そこに来れば水素の最先端の状況が把握できるような場を創り上げられたら、と考えています。是非、このような場に大阪大学にも入って頂きたいと思います。

大阪大学には、**最先端技術の拠点となる為**の指導を期待し、単に学内でこのような拠点がありますよというだけでなく、連携しなければ成しえない関連企業の研究や研究企画をとりまとめる異分野融合体制を指導して頂きたいと思います。先端技術の展開は、多様な人材、多様な企業をとりまとめる大学の指導を求めています。

(会長) 大阪大学も共創 (Co-Creation) を謳っていますので、いまお話し頂いた内容について、是非ご提案頂きたく思います。協働研究所、共同研究講座は、やはりその企業の利益を重視した共同研究のあり方になっています。これから必要とされる分野において、リーダーシップを発揮し、方向性を示し、プロジェクトに参加することで大きなメリットが生まれるような、それこそ「**聖地**」を造ることをリードできることが望まれますね。大阪大学でも、感染症などの一部ではそのようなプロジェクトが進められてはいますが、ものづくりの理工学分野で、世間の評価を受ける動きが望まれますね。

(間島社長) 是非、大阪の大学であることの見える化を望みます。大阪大学との関係では、元工学部長の村井先生に取締役として経営に参画頂いております、もうお一人、大阪大学出身の篠原さんに社外監査役を務めて戴いております。篠原さんは、**大阪大学経済人会**の発起人でもあり、このような関係もあって、総長ともお話をさせて頂いており、今後の展開に大いに期待いたします。

(会長) そこで、先ほどもお話が出ましたが、2025年の大阪万博はどう取り組まれますか。

(間島社長) 大阪関西万博は、**将来の主たるエネルギーである「水素」に関する日本の技術を世界に発信する絶好の機会**と位置付けています。先ほども少しお話ししましたが、万博期間中、**水素燃料電池船**を万博会場とユニバーサルスタジオ、そして中之島を結んで運航することにしています。また、南港エリアには関西電力さんと共同で水素ステーションを建設しています。燃料電池の船ですので、モーターで駆動する為、振動も無く静かですし、燃料を燃やしませんので匂いもありません。その為、船上で国際的なセレモニーを開催して戴くなど、世界に対して、日本の技術をアピールできるのではないのでしょうか。それまでには、神戸の研修所もできあがっていますので、万博との複合的な効果を生むような企画を考えたいと思います。

おわりに：「吾唯知足」

(会長) どうも長い時間にわたって、お話を伺って参りましたが、最後に、皆様にいつも伺っているのですが、大事にしておられる言葉や座右の銘などがあればお聞かせ下さい。

(間島社長) 座右の銘と言えるかどうか判りませんが、禅宗の「**吾唯知足(われただたるをしる)**」ですかね。この言葉はいろいろな場面で思う言葉なのです。あまり高望みしない、あるものでしっかりやっていく、すなわち自分に必要なものは何かを考えることが重要と考えています。

(会長) 過剰に望まない、しかしあるものをしっかりとこなしていくことが重要とのお考えがよく分かりました、このあたりは実際の経営でも活かされつつ、高望みでない、しっかりとした水素社会の構築と水素ビジネスのビッグバンにつながることを祈念しつつ、本日のインタビューを終わらせて頂きます

【註】「吾唯知足」:

この言葉は、竜安寺のつくばいで有名ではあるが、遺教経に「若し諸の苦悩を脱せんと欲せば、まさに知足を觀ずべし。知足の法は即ち富楽安穩の処なり。知足の人は地上に臥すといえども、安樂なりとなす。不知足の者は富むといえども、しかも貧し。不知足の者は常に五欲のために牽かれて、知足の者のために憐憫せらる。是を知足と名づく」とある。



(参考)

間島 寛 岩谷産業株式会社 代表取締役 社長執行役員 様 ご経歴

生年月日： 1958年 7月 3日

学歴： 1981年 3月 大阪大学大学工学部 溶接工学科卒業

略歴：

1981年 4月 岩谷産業株式会社 入社

2010年 6月 執行役員に就任

2011年 4月 常務執行役員に就任

2012年 6月 取締役 に就任 執行役員 に就任

2014年 4月 常務取締役に就任

2015年 4月 経営企画部、市場・経済調査部、広報部各担当

2017年 4月 専務取締役に就任

2019年 4月 取締役副社長執行役員に就任

2020年 6月 代表取締役社長執行役員

【インタビュー後記】

インタビューは、岩谷産業株式会社の本社を訪問してさせて頂いた。本社は御堂筋と本町通り交差点・東南角にある、「優雅に奏でる大人の庭園」と謳う「本町ガーデンシティビル」内にあり、本社の受付や会議室に素晴らしい絵画が掲げられ印象深い。

インタビューに入る前に大阪大学卒業を看板に、関西地区の経営者の間に人のつながりができ、ゴルフ仲間や、歓談する機会を持つ仲間など、大阪大学を一つの共通項での人のつながりが、いろいろな面で役にも立ち息抜きにもなっているなどと歓談させて頂いた。記事本文でもそれらの人のつながりについてもお話ししたいが、やはり、同窓生、あるいは部局が違っても「大阪大学」ブランドが生きており、同窓会の活動にも参考にして頂きたい。また、工学研究科にとっては、元工学研究科長・工学部長の村井先生が岩谷産業株式会社の取締役研究所長を務めておられ、工業会としてもつながりを感じます。

このように同窓会が人のいろいろなつながりやそのきっかけを生むとの言葉を頂いたことは、このインタビューシリーズの意義を語っていただいたようでありがたかった。

間島社長は、私が溶接工学科の助教授になって三年後のご入学で、私の「溶接破壊力学」講義も受けられた様で、ただ卒業生の馴染みは研究分野が関係し、所属された研究室の専門はかなり離れた丸尾研究室で、残念ながら現役時代の記憶はない。ただ、本日お話を伺って、天王寺高校の先生から大阪大学に世界で唯一の溶接工学科があると聞いて選択したという話は、私の場合と同じであることに感動すると共に、改めて、人の魅力を引き立てるようなキャッチコピーの意義を感じた。

間島社長は、温和は話し方で、論理的に答えていただき、本文のように有意義なお話を頂いたが、特に、こちらからは、岩谷産業さんということで、特に水素社会の位置づけや岩谷産業さんの将来展開などに、わざと話を振ったが、お読みいただいたように、明確な形で水素ビジネスの将来へのビジョンをお話しいただき、大いに期待をいだかせるものであったと感じました。

ただ、水素ビジネスの未来について、的確な内容の理念や実践をお話し頂き、今後グローバルに展開する上での「水素」の位置づけを明確に意識されている。万博では、水素燃料電池船を走らせる企画をまとめられ、それを水素ビジネスの世界発信に活用されようとしており、高い意識を感じました。

最後には大阪大学への期待について述べて頂き、大学への思いと共に、いかに先端技術の展開を大学がリードして行くべきかについて示唆に富んだお話を聞かせて頂いた。

インタビューを終えて、ビルの外に出ると、正に猛暑の日で、クーラーのありがたさを感じつつ、どのように電力を生み出すかについて考えさせられながら、熱い議論の後の暑い御堂筋を歩いて帰路へ。

大阪大学工業会会長
豊田 政男